

戦争からの逃避

稲宮 健一

鳥のように大空を飛びたいは昔からの夢だ。二十世紀の初頭に二宮忠八や、米国のライト兄弟が具体的に飛行機の原型を作り、人の力で空を飛べることを示した。残念ながら、日本では二宮の成果を評価できる人が現れず、折角動力飛行の一手手前まで近づいたが挫折した。米国では航空機産業の起爆剤になった。また、宇宙空間に飛び出したいという夢はロシアのツオルコフスキーや、米国のゴダードが先人で、前者は理論的に地球重力圏を脱出できる構想を数式で表し、後者は液体ロケットの実証実験を行った。この活動に刺激され、戦前にドイツを中心に宇宙旅行の夢が語られた。宇宙開発はロマンであった。しかし、開発成果は戦争中に爆撃機や、ロケットに使われ、両分野共に先端的な武器になり、膨大な戦費が注がれた。

戦後、大型爆撃機は民間航空機へ、宇宙の関しては、米ソが覇を競い開発が展開されたのは良く知られたことである。飛行機、宇宙共に最初は何にも束縛されない自由な発想が起点であった。しかし、これを世間一般は新規性を話題にするが、直ぐにはその価値は認められない。多くの人は、武器として国家予算がすぎ込まれ、産業化され規模を大きくした後にその意義を自覚する。

将来性のある発想は安全で住みやすい環境の中で、多面的に自由闊達な議論による試行錯誤を経て生まれる。例えば、戦争以前は科学技術の中心地は欧州であった。空中窒素の固定など、多くの産業が育っていた。しかし、戦争による欧州の国土の荒廃のため科学技術の中心地が米国に移って行った。例えば、アインシュタインが米国に移住したように、多くの頭脳が安全で、住みやすい米国に移住した。

現在、ロシアのウクライナへの侵略でロシア国内では高揚感が生じているが、長い目で見た時、厳しい言論統制と外部との遮断が行なわれている社会では抑圧の下で自らの進む道を政治の大勢に順応するようにはか選べない。これでは未来への発展はない。